

がんばれ！多文化共生マネージャー

よく「十人十色」と言うように、「多文化共生マネージャー」と言っても、その環境やマネージャーとしての取り組み方は、各地域、各組織それぞれ異なります。今回は、地域の実情に応じて多文化共生を進めよう、また、多文化共生を魅力の1つにしてまちづくりに活かそう、という取り組みをされているマネージャーを紹介します。

一歩ずつ地域のニーズに応えた仕組みづくり ～佐賀県～ 「多文化共生」を「まちの魅力」に ～福岡県北九州市～

全国市町村国際文化研修所
教務部多文化共生コーディネーター 加藤 純子

◆(財)佐賀県国際交流協会 ^{きたみかど}北御門 織絵さん (多文化共生マネージャー第37号)

遠隔地ならではの・・・

博多から特急かもめに乗って約1時間。緑豊かな山と田んぼののどかな田園をつきぬけて現れた佐賀駅。

去る平成22年2月18日、私は(財)佐賀県国際交流協会主催の医療通訳ボランティア研修会へ見学に行ってきました。

駅前にある佐賀市民活動センター内にある研修会会場へ向かうと、中から黒髪を1つにまとめた1人の女性が現れました。その方が第3期多文化共生マネージャーである、(財)佐賀県国際交流協会の^{きたみかど}北御門織絵さんです。北御門さんは今回の医療通訳研修を担当されています。

医療通訳ボランティア研修会が本格的に開講してから2年目。開催のきっかけは、以前から協会の相談窓口に、「医療機関、また外国人住民から通訳をしてほしい」という相談を受けた際、研修も何も受けていない語学登録ボランティアを派遣していた実態を改善したかったことから。そして、その頃医療通訳の依頼が増えてきたことから、まずは通訳者の人材育成から始めようと考え、地域の方を中心に通訳ボ



(財)佐賀県国際交流協会 北御門織絵さん

ランティアの募集を行いました。内容は、医療通訳者としての心得や自己管理

方法、日本の医療制度、病院の仕組みなど語学を限定しない概論と、語学別を実施するロールプレイという構成です。

今回伺ったのは、11月から3月までの開催中、後期4回連続講座の中の3回目、英語のシナリオロールプレイで、10名程度の方が参加していました。

元看護師の方を医師役、日本語教室に通っているインドネシアの方を患者役として、通訳のロー



(財)佐賀県国際交流協会

ルプレイを行うというもので、立場も語学力も様々な医療通訳ボランティアの方達が、1人ずつ患者の横に座って、通訳のトレーニングをしていました。北御門さんがコーディネーター役となり、通訳が間違えたり、行き詰まったりすると、少しずつヒントを出すなど1人ひとり丁寧にアドバイスをしていました。また、休憩時間も、「母語が英語でない人がほとんどですよ」など受講者に対し話を試み、様々な事例を紹介し共有していました。

専門的な知識を必要とする医療通訳者養成研修の場合、私がこれまで見てきた研修では、既に活動されている方が基礎から実践まで講師を務めているケースが多かったのです。しかし、佐賀県の場合、神奈川県で活躍されているNPO団体の指導を受けることになったものの、地理的要因と予算上の関係から、毎回の講師来所が困難であることから、導入講義

は講師に来ていただき、後半の語学別ロールプレイ研修は、北御門さんがコーディネーターを務め、研修結果や解決できなかった質問をNPOの講師へ報告し、遠隔にてアドバイスを
得る形式をとっていました。

また、ロールプレイは、(財)自治体国際化協会が地域で使えるように開発した汎用性が高い教材を使用するなど、自分の組織内での人材育成に役立てようとするところも見られ、工夫されている姿に新鮮さを感じました。

地域の変化

医療通訳者ボランティア講座の終了後、北御門さんと共に佐賀県庁内にある国際交流協会を訪問しました。

協会スタッフは、北御門さんのほか、平成21年度第2回(第9期)にマネージャーと認定された伊東あゆみさんと、もう1名の職員の方、企画交流課長、そして専務の5名です。事業は、職員3名でほとんどの事業を担当されています。

佐賀県の外国人の状況を見ると、県内の外国人登録者数は4,233人で県内全人口の0.4%を占めています。登録者数の上位を占める国籍は、中国、韓国・朝鮮、フィリピンです。

北御門さんのお話では、オールドカマーを除けば主に留学生が多く、また、最近は研修生や日本人の配偶者として中国や韓国の外国人女性も増加しているそうです。

時々、「日本語教室に通いたい」、「友達を作って自由に話せる場所が欲しい」など協会に相談が寄せられることもあります。佐賀県内の外国人住民は、散在して居住しているため、なかなか実態を掴むことができなかったり、掴めたとしても、県内にあるグループが少ないため、活動を紹介しようにもできない状況だったりするそうです。また、日本人の方でも佐賀県の県民性からか、引っ込み思案の方が多く、多文化共生に対しての想いはあってもなかなか市民活動に結びつきにくいそうです。

一方で、県西部の唐津地域で日本語支援ボランティア養成講座の開講をきっかけに、唐津在住の佐賀大学の日本語教師を中心とした日本語教室が開講されています。しかし地域の人々にとっては外国人数も少ないため「外

国人に日本語を教える」という事自体、イメージがわきにくく日本語を支援するボランティアの獲得、また、日本語を必要としている学習者にもなかなか情報が浸透していきません。平成22年度からはこの唐津日本語教室と連携し、唐津地域に力を入れていくそうです。

◆北九州市 ^{いっとく}一徳 仁さん

(多文化共生マネージャー第142号)

◆(財)北九州国際交流協会 伊藤 レニーローズさん (多文化共生地域づくりサポーター第31号)

新幹線JR小倉駅の改札を出て目の前に飛び込んできたのは、近代史の教科書に掲載している写



北九州の街に立ち並ぶ鉄鋼所の風景 (JR小倉駅より)

真を思わせるような大きく立ち並ぶ工場とそれに隣接する高い煙突。思わず、「あれ、何ですか?!」と聞いてしまった私。「あれは鉄鋼所ですよ。『北九州工業地帯』って聞いたことありません? 私たちにとっては珍しくないですけどね」と答えてくださったのは、北九州市国際政策課多文化共生係長(現 国際政策課政策係長)であり、多文化共生マネージャー第9期第142号の一徳仁さんです。

一徳さんは、平成21年度に「多文化共生」の入門コースとして設置した「第1回多文化共生の地域づくりコース(以下「地域づくりコース」)」と「第2回多文化共生マネージャー養成コース」を受講し、それぞれ「JIAM多文化共生地域づくりサポーター」、「(CLAIR)多文化共生マネージャー」として認定され、北九州市で活躍されています。

タブマネと地域づくりサポーター

一徳さんと訪問したのは駅直結のビルの中にある(財)北九州国際交流協会こくらインフォメーションです。

そこには、「第1回多文化共生の地域づくりコース」を一徳さんと同期で受講し、「JIAM多文化共生地域づくりサポーター」として活

「がんばれ!多文化共生マネージャー」
「一歩ずつ地域のニーズに応えた仕組みづくり」
「多文化共生」を「まちの魅力」に 福岡県北九州市

がんばれ！多文化共生マネージャー

躍されている（財）北九州国際交流協会相談員の伊藤レニーローズさんがいらっしゃいました。

北九州市の外国人登録者数は、平成21年3月末現在で11,681人、市内全人口の1.19%であり、韓国・朝鮮、中国、フィリピンといった順で、オールドカマーを中心に、留学生や日本人の配偶者、研修生・実習生など様々な方が住んでいます。

国際政策課多文化共生係は、一徳さんともう1人の担当者である永田教子さんの2人で担当され、主に市として多文化共生に関する施策立案や方針などを定め、（財）北九州国際交流協会と連携しながら業務を行っています。

現在の主な取り組み事項は、平成22年度で終了となる「北九州市国際政策推進大綱」の見直しです。一徳さんによると、平成18～22年の大綱の中で多文化共生関連の記述がわずか半ページである事を見て、「これでは不十分だ」と感じた事により、「支えられる側じゃなくて市民として」をモットーに外国人住民の意見交換会等を平成21年度内に年2回実施したり、また、自ら協会の事業にも度々参加されているそうです。



（財）北九州国際交流協会こくらインフォメーション中では、中国人の中学生が教科学習と日本語学習に励んでいました。

一徳さん曰く、「実際に現場に行ってみるとわからない事が多いし、施策も何も策定できないので」とのこと。

サポーターである伊藤さんは、（財）北九州国際交流協会にてタガログ語と英語の相談員として勤務しています。通常は、相談業務のほかイベント企画や情報提供などに従事しています。現在の業務に就くきっかけについて伺うと、4年前の平成18年に、市の外国人懇話会に参加したことが始まりで協会を知るようになり、2年前に相談員として業務を開始したそうです。

懇話会までは、協会の存在自体知らなかったとのことですが、今では外国人女性向けに、

もちつきや日本食の料理講座、日本人向けにフィリピンの文化を伝える講座を自ら企画し、講師も務めるほどで、伺った日の1、2日前にも地元紙に掲載された事を話していただきました。

協会に関わる前後で変化したことを伺うと、相談員として自分から外国人住民に情報を伝えることで、視野が広がったそうです。また、講座を開催することで、他団体から様々な多文化共生関連のイベントの講師依頼が増えたそうで、忙しくされているようでした。

一徳さんと伊藤さんのお2人にJIAMでの研修受講前後の変化について伺ったところ、実は、JIAMの地域づくりサポーターコースに参加するまではお互い顔見知り程度の知り合いだったのが、研修をきっかけとして、度々メールや事業などで情報交換を行うようになり、地域づくりコースの演習時には、『外国人集住都市会議』ではなく、『外国人散在都市会議』を開こう！と他の九州地域の受講生の方々と盛り上がっていたそうです。

福祉や教育と通じる

「多文化共生という言葉自体、まだまだ一般的ではない中で、業務を行うことは難しいですか？」と質問したところ、

「そんなことはないですよ。現在の北九州市の多文化共生の業務は、これから手をつけていく段階であり、自ら考えて関係者をお願いをしていく事が多く、非常に楽しいです」という回答が返ってきました。また、現在の係に着任時は、国際関係は初めてで、「国際交流」さえわからず、『多文化共生って何?』という程度でしたが、関わるにつれ「国際交流」と全く次元が違うものだと感じてきたそうです。しかし同時に、元々、福祉や教育分野に多く関わってきたため、現在の業務に通じる部分が多くあるとも感じられたとのことでした。

対症療法でなく「まちの魅力」として

北九州市の外国人登録者は市内全人口の1.19%と、外国人住民の数としては必ずしも多いとは言えない数字ですが、市として「国際政策推進大綱」を見直す中で今後の方向性を「都市の魅力」の1つとして、外国人市民が暮らしやすい「多文化共生」のまちづくり

をさらに推進していくことが必要”と掲げられています。それは市役所を訪問した際、一徳さんや、同僚、上司の方の話の節々の中から伺えました。

平成14年度から実施している「国際戦略会議」を昨年度から「経済産業振興」、「国際協力」に並んで「多文化共生」を重要な検討分野としてリニューアルし、市全体の国際政策として扱っていくなど、国際関連部署だけでなく、行政各分野の連携による新しい多文化共生の街づくりの流れを強く感じました。

その背景として、「北九州市が、元々鉄鋼業が盛んであり、また、海も近いことから、労働者の町として外からの人や文化の流入に対して受け入れやすい地域ということもあるからじゃないですか」という一徳さんの言葉に、歴史的経緯と、貨物取扱量全国4位の北九州港を始めとして貿易交通網が盛んな北九州市を東アジアへの戦略として売りだそうとする現在の流れが重なっているからなんだろうなと、私は感じました。

自分にとって多文化共生とは？

伊藤さんに北九州市の外国人住民のコミュニティについて伺ったところ、居住形態はバラバラで、散在しており、公営住宅のほか、一戸建てに住む外国人住民もおり、コミュニティと言えるものは多くは存在しないが、教会の集まりがあり、いくつもの外国籍の方が参加しているそうです。伊藤さんは、その中でもフィリピンのコミュニティのリーダーだそうですが、伊藤さん曰く、「自分は、国際交流協会にいる立場として、コミュニティをしっかりと支援することは難しいと思うが、日本人住民や他の外国人住民との交流の場を提供したい」と現在のご自身の立場を振り返りながら



左から、北九州市国際政策課 一徳仁さん、(財)北九州国際交流協会 伊藤レニーローズさん、北九州市国際政策課 永田教子さん

からお話をしてくれました。また、一徳さんと同じ、多文化共生係の永田さんからは、多文化共生とは、「外

国人だから、日本人だからではなく、同じ立場の人間として仲良くなっていこうとする自主性、また、違いがはっきり分かる関係を越えた中で、お互いが認め合っていく、繋がっていくことが大事だと思う。そうした視点を持つために、自治体職員としてこれまであらゆる職場での経験は無駄になっていなかった、役に立っている、と最近感じるようになりました」とお話しいただき、最後に一徳さんからは、「極端に言えば、最終的に『多文化共生』という担当部署がなくなるのが目標で、どの部署でもみんなで『多文化共生』が普通になって対応できるようにしたい」と、それぞれの想いについて熱く語っていただきました。

2つの地域のマネージャーにお会いして

今回2つの地域で活躍されているマネージャーと地域づくりサポーターにお会いし、いずれの地域も外国人住民の散在地域の中でコツコツと確実に事業に取り組み、研修でキーワードとなった“（効果的な事業を実施するために）まずは足で稼ぐ”ということが実践されているようでした。

また、それぞれの「ホーム」に伺うことで、様々な地域環境の中で課題を背負ってJIAMの研修に参加される背景を垣間見る事ができました。

これから私自身も“足で稼ぐ”事を実践し、様々な地域の背景や課題をもって取り組んでいる全国の多文化共生マネージャーの方の意見を聞いて、さらに皆様の役に立つ充実した研修を提供していきたいと考えます。

北御門さん、そして一徳さん、伊藤さん、永田さん、お忙しい中ご対応くださり、本当にありがとうございました！

*当取材は、平成22年2月時点のものです。北九州市の一徳さんはその後、国際政策課多文化共生係長から、国際政策課政策係長に就任され、永田さんも政策係に異動され、取材当時の業務とは離れています。しかし、多文化共生のまちづくりをより進めることができる部署ということですので、今後の更なる活躍に期待します！